

序論

現在、日本は宗教を信仰しない無宗教化が進んでいる。この背景には科学や経済の発展による合理的な思考の一般化により、宗教の超人的な存在や価値観が人々から離れて行ったことや、個人主義の浸透により、個人が尊重されそれぞれの価値観や信念を持ち、宗教に依存しない生き方が広まったことなどが考えられる。では、そのような宗教衰退の時代に宗教者は社会に対し、どのような関わり方が求められるのだろうか。宗教者の役割の一つとして、高橋原が『ケアの場に求められる宗教性とは何か』において

誰でもできるが、「宗教者でもできる（でなくてもできる）」役割であるという一面は確かにある。しかし、すでに亡くなった人がもう苦しんでおらず安らかにしているというメッセージや、生と死の意味について説得力をもって語ることは、まさにそのような知を蓄積してきた伝統の権威を代表している宗教者が得意とする領域であることも確かである。また、言葉によらず、儀礼的な関わりによって心のケアを行なうことは宗教者の特権であろう。これらは、「宗教者だからできる（宗教者にしかできない）」ことと言ってよい。¹

と述べている。このように科学には干渉できない、死や死後の世界といった問題に宗教は向き合い、対応することができるといえる。その働きが社会から求められている。

浄土真宗本願寺派の活動の一つにビハラー活動がある。ビハラー活動とは、仏教徒が仏教と医療と福祉の協力によって、支援を求めている人の苦しみに共感し、少しでも苦しみを和らげようとする活動のことだ。仏教では

人の避けることのできない根源的な苦しみとして「生老病死」の四つの苦しみがあるとされている。今回はその中の「死」の苦しみに対して、浄土真宗ではどのように向き合い、死の苦しみを和らげるのかをビハラーラ活動を通して考察する。

第一章では、実際にビハラーラ活動を行っている、長岡西病院とあそかビハラーラ病院の僧侶の活動を通して、ビハラーラ僧侶の理念と役割についてまとめる。第二章ではビハラーラとカウンセリングを比較し、僧侶が悩める人に対してどのような方法で接しているのかをまとめる。第三章では、浄土真宗ではどのように死という苦しみに向き合っているのか、浄土真宗の教義をもとに明らかにしていく。

本論

第一章 長岡西病院とあそかビハラーラ病院における緩和ケアの理念とビハラーラ僧の役割

第一節 現代におけるビハラーラ僧の必要性

では、ビハラーラ僧は実際にどのような理念のもとに活動をして、どのように社会に貢献しているのだろうか。ビハラーラ僧の活動を、長岡西病院でビハラーラ僧として勤務されていた森田敬文の論文を中心に検討していきたい。まず、ビハラーラ僧の問題意識について、森田は論文「ビハラーラ僧の実際」において、このような問題提起をし

ている。

元来、日本においては、仏教が人の生死に深く関わってきた歴史がある。特に、檀家制度が確立した江戸時代以降、それぞれの寺院は、その地域において、宗教行事を執り行うことで、周辺住民と交流をもつとともに、看取りにおいても大きな役割を担うこととなった。(中略)しかし、時代は下って、それぞれの地域共同体の崩壊が進み、人々のつながりの希薄さが目立ち始める頃には、寺院も次第に世俗化された。そして、人々は生きていく間に仏教者と関わることについて積極的ではなくなり、いつしか仏教僧侶に対して、「縁起が悪い存在」や「不吉な存在」と言ったイメージを持ち、死との結びつきだけを強調する傾向が目立ちはじめた。²

とあるように、元来、仏教僧侶は檀家制度のもとに地域共同体と結びつき、地域の人々と交流し、看取りにおいても大きな役割を持っていたが、現在は葬儀など「死」との結びつきだけが強調されるようになり、生きていく間の仏教者との関わりは希薄になっている。この問題に対して、森田はこう論じている。

“ 仏教 ” というものを “ 生きた仏教 ” に活かすことができる転換の一つとして、仏教者が法務（一般的には檀家参りや月参り、法事や法要など）以外の様々な活動を実践することが挙げられるのではないか。³

とあるように、仏教を生活のなかで活かす仏教になるために、檀家参りと共に、新しい活動の一つとして「ビハラ僧」が求められるといえる。

したがって、この森田の問題提起は、「死」と仏教者の結びつきが強調される現代に、「ビハラ僧」としての活動が、仏教を“生きた仏教”への転換となり、仏教者が人々と交流できる活動になっていく可能性を指摘してい

る。

第二節 長岡西病院ビハーラ病棟の設立理念

新潟県中越地区に位置する長岡西病院に、ビハーラ病棟がある。一九九二年に長岡西病院の開設と同時に開棟され、以下の三つの理念を掲げている。

理念1 限りある生命の、その限りの短さを知らされた人が、静かに自身を見つめ、また見守られる場である。

理念2 利用者本人の願いを軸に看取りと医療が行われる場である。そのため十分な医療行為が可能な医療機関に直結している必要がある。

理念3 願われた生命の尊さに気づかされた人が集う、仏教を基礎とした小さな共同体である（ただし、利用者本人やそのご家族がいかなる信仰をもたれていても自由である）⁴

長岡西病院ビハーラ病棟では、これらの三つの理念のもとに、特定の宗派に属さない、超宗派として仏教者たちが医療関係者と協力してビハーラ活動をしていることがわかる。今、病気をかかえながら限られた時間を生きている人に対して、自分を省みることのできる場所として、ビハーラ病棟がある。自分を省みることができるとは、自分のいのちが願われた生命として大切にされるということである。

ところで、森田は「ビハーラ」という言葉の語源について、サンسكريット語で「休養の場所、気晴らしをす

ること、僧院または寺院」（「ビハーラ僧の実際」二〇頁）という意味があるといい、論文の中では「ビハーラ」という語の意味を「仏教を基礎とした生と死が交錯するターミナルケア施設であるビハーラ病棟及びその活動」（「ビハーラ僧の実際」二〇頁）として捉えることができると述べている。

また、森田はビハーラ病棟を「自宅と病院の中間的役割を担う場（例えるなら、自宅で過ごしているような環境に、適時、医療的介入ができる設備が付属されたような感じ）」（「ビハーラ僧の実際」二〇頁）であるとい、ビハーラ病棟の特徴を、

決して死ぬための場所ではなく、その人が持つて生まれた寿命がある限り、精一杯いのちを輝かせて生きていく場所である。⁵

と述べている。このように、ビハーラとは「休養の場所、気晴らし」のできることを意味し、自宅と病院の中間的な役割を果たしている場所として存在することがわかり、ビハーラのあたたかさや柔らかい雰囲気を感じるることができる。最も重要なことは、長岡西病院ビハーラ病棟の三つの理念に示されているように、ビハーラ病棟は、その人がいのちを輝かせていく場所として存在していることである。ここから、今を生きる仏教としての転換の可能性が見られる。

第三節 長岡西病院ビハーラ病棟におけるビハーラ僧の実践

森田は、病院職員として勤務している常勤ビハーラ僧の実践を列挙される。その内容は大きく分けて、「日常

的な身の回りのお世話」と、「仏教者としての宗教的行為」の二つに分けることができる。まず、日常的な身の回りのお世話として次のように述べている。

食事の配膳や外出の同行など雑務中心の身の回りのお世話を通じて、関係性を構築している。(中略) 患者(あるいは家族)との会話(主に聞き手)を繰り返しながら関わりを持っている。先の何気ない身の回りのお世話が重要で、それがあがるが故に、関係性を深めていきやすいことを現場での実践を通して強く学ぶこととなった。⁶

とあるように、医療的でも宗教的でもない、専門性が見えない業務を行っている。このような専門性のない実践があることで患者との関係性を深める事ができる。このビハラー僧のような患者でも医療従事者でもない、患者を医療対象としてみていない第三者がいることで「自宅と病院の中間的役割を担う場」(「ビハラー僧の実際」二〇頁)という森田が考えるビハラー病棟のあり方を可能にし、ビハラーを安らげる場として成り立たせる要因になっている。

次に、仏教者としての宗教的行為を次のように述べている。

朝の時間帯と夕方の時間帯それぞれ一五分間(中略)で勤行を執り行う。基本的には、読経と法話というスタイルではある(中略)患者や家族の願いを軸にするという理念があるように、こちらのスタンスとしては、当然この病棟に入院してからと言って、毎日の勤行への参加を強制しない。あくまでも、自分たち自身が参加してみようかなと意思表示があつてからお誘いする形になる。⁷

とあるように宗教者としての業務は読経や法話がある。ここで注目したいのは、ビハラ僧は自ら患者に対して積極的に布教活動をしているのではなく、ただ病棟に存在しているだけだということだ。患者の信仰については、患者の意思を尊重している。ビハラ病棟に入院したからには、仏教の信仰を強制することはないことがわかる。森田はそのような存在だけのビハラに次のような意義を見出している

対象者にとって、直接的な仏教行為ではなく、ビハラの理念にもあるように「見守り」がなされる雰囲気作りとして、仏教が機能しているということになり、それこそがビハラにおける仏教の有様ではないかと推測される。⁸

このように、僧侶が能動的に仏教の教えを伝えることだけが実践とされていない。見守りがなされる雰囲気作りとして、ただそこに仏教者がいることが実践である。仏教が病院の中に存在することで、患者に自宅のような安心感を持ち、今を生きるいのちとして生きてもらうことをサポートすることが、ビハラ僧の実践だと考えられる。

第四節 あそかビハラ病院に見える緩和ケアの基本姿勢

次に、僧侶が緩和ケアにおいてどのようなことを必要とされているのか、あそかビハラ病院のビハラ室長である花岡尚樹の論文を中心に検討していきたい。まず、ホスピス・緩和ケアの目的について花岡は論文で次のように示している。

身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな痛みを総じて全人的苦痛といいますがそれに対して医師・看護師・薬剤師・管理栄養士などの多職種がチームを組んでケアに当たります。そして、痛みなどの症状緩和を通して患者さんのQOL（人生の質・その人らしさ）を向上させるのが、ホスピス・緩和ケアの目的です。

9

このように、ホスピス・緩和ケアの目的は、患者の痛みを和らげてただ延命治療をすることが目的ではなく、患者がその人らしく最後まで生き抜くためにサポートすることだとわかる。患者が死に直面した時、その死を遠ざけた上で、死ぬまでの残された時間で患者が何をしたいのか何を求めているのか、今を生きる命として向き合い、その要望を実現させ、QOLを向上させることが、ホスピス・緩和ケアに大切な姿勢だとわかる。

また、ホスピス・緩和ケアでビハラー僧が活動する上で、一番大切なことを花岡は次のように述べている。

まず一番大切なことは「社会人としての基本マナー」です。

ごくごく当たり前のことですが、「おはようございます」と明るく挨拶をすること。「ありがとうございます」と感謝の気持ちを伝えられること。「すみません」と率直に謝ることのできる謙虚な態度。（中略）社会人としての基本マナーだけでなく、「病院での常識・マナー」も大切です。（中略）とにかく感染・衛生面に注意しなければなりません。身体介護などの自分の判断で行うのではなく、必ず病院看護師の指示を仰ぐことが大切です。（中略）良かれと思って成した行為が、相手を傷つけ、引いては自分を傷つけることも起こりうるのが医療現場です。ですので、個人情報の保護を含めて、「医療現場での常識・マナー」も遵守

しなければなりません。10

ここからわかることは、ビハーラ僧の一番大切なことは、布教などといった僧侶として活動ではなく、医療活動を妨げることなく、一般的な社会人としてのマナーを持ち、人に嫌な思いをさせないことだとわかる。このような当たり前の話が一番大事だと言う要因として、第一節で述べたような、地域と関わりをなくし、不吉なイメージを持たせてしまった仏教者の姿勢がある。ビハーラ僧のような姿勢はそのような一般的な僧侶にも求められるだろう。また、花岡は「良かれと思って成した行為が、相手を傷つけ、引いては自分を傷つけることも起こりうるのが医療現場です。個人情報保護も含めて、「医療現場での常識・マナー」を遵守しなければなりません」と述べている。(花岡尚樹、「医療現場における僧侶の役割」、『ビハーラ入門』四〇頁) また、そのようなマナーはビハーラが安らぎの場所であるための、妨げにならないために必要である。その上で患者が残された時間を自分らしく生きられるようにサポートし、患者の「○○」を上げることがビハーラ僧に必要とされることだ。

第五節 あそかビハーラ病院におけるビハーラ僧の実践

ビハーラ僧がどのような実践を用いて、患者に対しその人らしく生きるサポートをしているのか花岡尚樹の論文をもとに考察していく。ビハーラ僧のような医療現場にいる宗教者の役割を次のように述べている

人は老病死という人生の危機に直面した時、自分が生まれてきた意味や死んでいくことの意味を問いだし、元氣なときには経済的に満たされることや、社会的な地位を高めることに、自分の人生に価値を見出す。

うとします。しかし、老病死によってこれまでの人生の依りどころや価値観が崩壊したとき、新たな依りどころや生きる価値観を見出そうとします。老病死は自分のいのちを超えた価値に出会えるチャンスであり、そのお手伝いをするのが宗教家の役割です。¹

このように、老いや病による死は、先延ばしにすることはできるが必ず訪れるものであり、科学の発展によって、死を遠ざけることができても無くすことはできない。この死に対して向き合う事ができるのが、宗教であり宗教者である。日本では宗教離れが進んでおり、宗教に触れる機会が減っている。ビハラ僧として病院に僧侶がいることよって、宗教を身近に感じられるということも役割の一つだ。死に対して向き合える一つの要因として、宗教、浄土真宗には死後の世界があることだ。死後の世界のような科学の範疇を超えたことに対し浄土真宗には浄土という答えがあることで、死に直面している患者に対し向き合うことができる。患者に接する人の死生観の重要性について花岡は次のように述べている。

僧侶は阿弥陀さまの教えを聞かせていただく身として、死の前には無力な存在でありつつも、死を滅びとしてではなくお浄土に参らせていただくという死生観を持ち合わせています。もしも「死んだらどうなるの？」と問われたときに、そこに寄り添う人が、死ぬことは虚しい滅びとする死生観を持ち合わせていたとします。するとどうでしょう。自らの死生観がぶれてしまうと、患者さんの思いを受け止めきれなくなるかとあります。^{1 2}

とあるように、死は滅びではなく、死の後にはまだ続きがあるという死生観を持っている人は、「死んだ後どう

なるの？」といった死後の世界についての質問に対し向き合うことができる。宗教を通した自分の考えがあるからこそ、自分と違う価値観を持った人に対して違いを理解し、敬意をもって深く関わることができる。このような姿勢によって、ビハラーは患者を終わりゆく命ではなく、今を生きる命として見ることができるといえる。患者に対し敬意をもって接するからこそ、その人らしく生きるサポートができるのだと考える。

しかし、ビハラーは自らの布教は行っていない。仏教の教えや死生観をビハラーが持っていたとしても伝える機会はあるのだろうか。ビハラーでは、第三節にあるように患者の価値観や思想を尊重し、宗教を押し付けない姿勢をとっている。それでは、ビハラーは患者に対して、「老病死は自分のいのちを超えた価値に出会えるチャンスであり、その出会いをサポートするのが宗教家の役割です」（花岡尚樹、「医療現場における僧侶の役割」、「ビハラー入門」四二頁）とあるが患者をどのようにサポートしているのだろうか。花岡が述べるビハラーの意義から考察する

ボランティアの場合は、「ケアする私」と「ケアされる他者」という横軸の関係性となります。ビハラーの場合は、阿弥陀さまという縦軸の関係性がメインとなり、「ともに願われている存在」という視点がボランティアとビハラーの大きな違いになります。（中略）医療現場での僧侶は浄土真宗の教えを直ちに説く立場ではありませんが、教えをいただく身としておられることなく、かつ患者さんの死への不安にも一緒に揺れることのできる、「竹のような存在」が、僧侶であることの意味であります。¹³

ここから分かることは、ビハラー僧は患者に対して具体的なケアを行う立場ではなく、ビハラー僧も患者も共に

阿弥陀仏の救いを受ける立場であるということだ。また、ビハラーにおける信心の重要性について花岡は次のように述べている。

出離生死の前では、自身の力は当てになるものではなく、自らの無力さを知らせているのが「機の深信」、自らの無力さを知らされているままが阿弥陀さまのお救いに任せている「法の深信」という二種類です。

医療現場で活動する僧侶には、自分自身向き合う姿勢と同時に、ゆるぎない信心が求められますが、それはまさに二種深信そのものであり、その「自信」をもって必然的に「教人信」していく、「自信教人信」が臨床の場で求められます。そしてそのような存在が医療現場で活動することにより、阿弥陀さまから願われている安らぎが伝わるのが、医療現場におけるビハラーの意義があります。¹⁴

このように、自らが無力だと信じる「機の深信」があるからこそ、患者の死の苦しみに対し共に悩み揺れることができる。そして、そんな自分だからこそ、阿弥陀仏によって救われるのだと信じる「法の深信」があることによって、浄土真宗における信心が揺るぎないものになる。自分が阿弥陀仏によって救われるのだと信じて疑わない、ビハラーがそばにいて共に悩むことで、直接伝えなくても自然と教えが伝わるのだ。

以上より、長岡西病院ビハラー病棟とあそかビハラー病院のビハラーの役割はどちらも、仏教の思想をもとに僧侶と医療が協力して、死を直前にした患者が、残された命を自分らしく生きることがサポートする場だとわかる。ビハラー僧の実践としては、積極的に布教を行うのではなく、傾聴や身の回りのお世話を通して患者に寄り添い、仏教が存在する安らぎのある空間をつくることである。

第二章 ビハーラとカウンセリングの比較

第一節 ビハーラとカウンセリングの接点

ビハーラについて浄土真宗本願寺派社会部のホームページで次のように述べている

「ビハーラ活動」とは、仏教徒が、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげようとする活動です。そして私たち自身が、苦しみや悲しみを縁として、自らの人生の意味をふりかえり、死を超えた心とながりを育んでいくことを願っています。すなわち、「ビハーラ活動」とは、「生・老・病・死」の苦しみや悲しみを抱えた人々を全人的に支援するケアであり、「願われないのち」の尊さに気づかされた人たちが集う共同体を意味します。¹⁵

このように、ビハーラとは生老病死といった根源的な苦悩を対象に、その苦悩を和らげることを目的としている。そこで、心の悩みを対象にする活動としてカウンセリングがある。このカウンセリングとビハーラにどのような共通点や相違点があるのか理解し、ビハーラへの理解を深めていく。

まず、カウンセリングとは何か滋野井一博は次のように述べている

心理的カウンセリングは、カウンセリングを行う人（相談される人）カウンセリングを受ける人（相談する

側・来談者）とのコミュニケーションを通じた人間関係の中で展開されます。（中略）心理的なカウンセリングとは、心理学的な理論を背景に悩める人とともに考えながら歩む営みであるともいえます。したがってこのカウンセリングは、心の悩みの解決を図るための手段や方法を伝えたり教えたりすることではなく、カウンセリングを通して悩める主体が心に抱く『気づき』を通して心の癒しの基盤にしながら展開されます。そして、その悩みの生じた真の原因を探り、クライアント自らが自己の内面を深く洞察し、人格の統合・完成を目指す過程において、新しい自分に出合いながらあるべき自分や望ましい自分が志向されるアプローチであるといえます。¹⁶

とあるように、カウンセリングとは心理学の専門的な知識をもとにカウンセラーが、様々な悩みを持ったクライアントと悩みについて共に考え歩んでいく活動のことだ。このコミュニケーションの中でクライアントに起こる『気づき』により、自己理解が深まり悩みが悩みではなくなることを目標としている。また、小正浩徳は「こうしたカウンセリングで重要となるのは、積極的傾聴です。これは、ただクライアントの話すことを聞けばよいというものではありません。クライアントの「心」を聴こうとしていくのです。」¹⁷と述べている。

ここから、ビハラーとカウンセリングの共通点は、人の悩みに対し、その悩みを解消するために共に悩み考えることだとわかる。内容として傾聴を基本としているところも同じだ。また、相違点としては、話を聴く側、カウンセラーの背景にあるものが、心理学か仏教かということだ。

第二節 ビハーラとカウンセリングの相違点

次にカウンセリングとビハーラの違いについて小正浩徳は次のように述べている

カウンセリングは、クライエントとカウンセラーの二者関係で行われています。そこでの話題は日常生活の悩みであり、その悩みの解消は、“本当の自分”に気づくことでした。人と人が出会い、そこで体験されることについて、クライエントは自分の思いを語り、カウンセラーはそうした思いを受け止め、的確にクライエントに返していくことを繰り返していくのです。

ビハーラではどうでしょうか。老病死に苦しむ人同士の二者関係で行われます。そこでは、カウンセリングにおける受容や共感が大切な姿勢となると思います。しかし、カウンセリングとは異なるところがあります。それは、仏の教え（仏教）に向き合うということです。老病死という誰も逃れられず、みな同じ道を通る者同士として、この世の真理を見抜かれた人の言葉を一緒に聴いていくということです。¹⁸

ここからビハーラとカウンセリングの違いは、カウンセリングは悩みを持つ者と悩みを聴く者の二者関係で、ビハーラは同じ悩みを持つ二者が第三者である仏の話聞くことだ。日常生活で起こる悩みについては、カウンセリングにより“本当の自分”に気づくことで解消できる。この“本当の自分”に気づくというのは、自分の中にある答えにカウンセラーとの対話によって気づくことだと考える。しかし、老病死のような根本的な苦しみによる悩みに対して、自分の中に答えを見つけていくことは難しい。そこで仏のような超人的な存在が必要であり、ビハーラには仏教が存在している。ビハーラでのビハーラ僧は、何かを施す立場ではなく、共に同じ苦しみを持

ち共に悩んでいる立場であり、そのビハーン僧が仏教者であることで、仏という第三者の声を聴く機会を与えられると考える。

第三章 浄土真宗における死への向き合い方

第一節 浄土真宗の救い

浄土真宗ではどのようにして死の苦しみに向き合うのだろうか。玉木興慈は浄土真宗の死の捉え方を次のように述べている。

いつ、どのように死が訪れるかはわかりません。けれども、皆に等しく、死が訪れるのです。生きているということと、死ということは、決して切り離すことはできません。死となりあわせにある生を生きているのです。生死を超える道を示す教えが仏教です。生死の迷いを超え、仏になる道を教えているのです。¹⁹とあるように、浄土真宗では、死の苦しみに対して直接その苦しみを取り除くのではなく、死を受け入れ、仏になることで生死の迷いを超えることができるかとされる。では、私たちはどのようにして仏になるのだろうか。阿彌陀仏の本願である第十八願成就文では次のように説かれている。

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生れんと願すれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と正法を誹謗するものとをば除く²⁰。

鍋島直樹は、この本願成就文の受け止め方を親鸞の『末灯鈔』を引用して次のように述べている。

眞実信心の行人は、撰取不捨のゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。『親鸞聖人御消息』『末灯鈔』第一通²¹

したがって、阿弥陀仏の本願を疑いなく信じれば、臨終に念仏を称えて阿弥陀如来の来迎を待つ必要はなく、平生の時から、阿弥陀仏のみ心のうちに撰取され見捨てられることはありません。撰取不捨とは、仏の大悲に私がおさめとられ、迎えられ、今ここで、正定聚、すなわち、仏になるべき身と定まることです。人間にとって眞実に生きる道は、仏の心にいだかれ、眞実なる仏の心をたまわって生きる以外にないという教えです。²²

とあるように、私たちは自ら仏になるために何か行動するのではなく、ただ阿弥陀仏を信じ、念仏を称えるだけで阿弥陀仏の本願力によって、浄土に往生し仏になることが決まっている。それが浄土眞宗の教えである。そのような阿弥陀仏の救いを受けて生まれる眞の救いを鍋島は次のように述べている。

眞の救いとは、今ここで仏の大悲にいだかれているという深い安心をうることであり、どのような最期を迎えようとも、如来の本願力によって浄土に往生できるといふ未来が確かに開かれることです。いつでもどこにいても、仏の他力に撰取されて見捨てられないからこそ、凡夫である人間は、普段の生活に浮き沈みがあるろうと、安心して泣いたり笑ったりすることができると言えるでしょう。²³

とあるように、浄土眞宗における「救い」とは、死の恐怖や悲しみを完全に取り除くことではない。むしろ、死

への不安に揺れうごき、泣いたり笑ったりする凡夫である私たちが、その弱さを抱えたままの姿で、阿弥陀仏の大きな慈悲に包まれていると気づくことにある。阿弥陀仏の救いは苦しみの中にある私たちを決して一人にはしないと支え続ける働きであると言えるだろう。『歎異抄』の第三条の「善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」（『浄土真宗聖典（註釈版）』八三三頁）とあるように、煩惱から離れられない私たち凡夫を、悪人とし、悪人だからこそ阿弥陀仏の救いの目当てであるとした。

また、死の苦しみとして、大切な人との別れがある。そこで、鍋島直樹は親鸞が浄土について門弟に送った手紙を引用して次のように述べている。

かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ。『末灯鈔』第十五通²⁴（覚信の死に際しての手紙）
親鸞聖人が「かならずかならず」とくりかえして呼びかける言葉は力強く、極楽浄土でまた会えるという救いの確かさが伝わってきます。ここより、親鸞聖人は、死は終わりではなく、極楽浄土に誕生することであり、死別してもまた会える世界であると教えています。「俱会一処」と『阿弥陀経』にとかれる世界です。死ぬこと自体は決して不幸ではなく、人間の思いの及ばぬ死の彼方は、仏の光に満ちていると説いて、人々に死を超えた解決を示しました。浄土とは、懐かしき故郷であり、また会える世界です、そして、今この世界の人々を照らし護る光の世界です。阿弥陀仏の願いを聞き信じ、ただ念仏するところ、必ず浄土に生まれ、苦しみもすべてなくなり清らかなさとりに転じられます。浄土とは、亡き人々と愛する人をつなぐ、心のふるさとです。²⁵

とあるように、親鸞は死別を永遠の別れではなく、先に亡くなる人は浄土で仏となり、残った人もまた、やがて浄土へ往生して再会できると説いている。どの宗教も信じていない無宗教者の死生観では、死はすべての人との永遠の別れを意味するが、浄土真宗においては、死は永遠の別れではなく、浄土での再会を約束された一時的な別れだと意味づけられる。この、また会えるという約束こそが、大切な人を失う悲しみの中にいる人にとって、大きな救いになるといえる。

第二節 他者への寄り添い

前節では、浄土真宗における救いが、死の恐怖や悲しみを抱えた凡夫をそのまま包み込む「摂取不捨」の働きであることを確認した。しかし、死という危機に直面した時、私たちは自分一人の力だけでその救いを信じ、救いを感じることは簡単ではない。不安や疑いに揺れ動いてしまう私たちが、阿弥陀仏の救いに出会うためには、その教えを自分に伝える人物が必要である。親鸞自身もまた、師である法然との出会いによって阿弥陀仏の教えを知った。親鸞の法然との出会いについて、打本弘祐は次のように述べている。

末木文美士は、「親鸞自身は、その出自や比叡山時代について一切語ることをしていない。親鸞の自己認識としては、その人生は法然との出会いから始まるのである」²⁶と述べているが、親鸞にとって法然との出会いが人生の画期であったことへの的確な表現であろう。『歎異抄』に「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」²⁷と記されているように、法然が説く選択

本願念仏の道は、親鸞にとって比叡山上での修行生活では感得するに至らなかつた生死の問題を解決する一筋の白道であり、もし騙されその教えによつて地獄に落ちたとしても後悔しないと他者に語るほどに深く信賴していたのである。²⁸

また、鍋島直樹は、『高僧和讃』を引用して、親鸞の法然との出会いについて次のように述べている。

曠劫多生のあひだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずは

このたびむなしくすぎなまし²⁹

「私親鸞は、遙か昔から生死を流転し、迷いを離れることのできる強い縁を知らなかつた。先生の法然聖人がいらつしやらなかつたら、このたびの人生もまた虚しく過ぎてしまったことでしょう」という意です。それほどに自分を理解して導いてくれる人に遇えることは心の支えとなります。³⁰

とあるように、親鸞でさえも比叡山での修行では死への苦しみを取り除くことはできなかつたが、そのような親鸞だからこそ、善知識である法然との出会いを、地獄に落ちても良いと言うように、生涯をかけてでも信じられる救いとして深く受け止めたのである。浄土真宗における救いとは、自力の修行によつて得られるものではなく、先に教えを聞き、阿弥陀仏に救われて、その喜びを伝えてくれる人との出会いを通じてもたらされるものだけといえる。

法然との出会いが親鸞にとって救いとなったように、親鸞もまた、多くの人々の善知識であった。では、親鸞は具体的に悩める人に対しどのような言葉をかけて寄り添っていたのだろうか。唯円は『歎異抄』第九条で

念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐるりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらん³¹

と、念仏を称えても喜べず、早く浄土へ行きたいと思えないという悩みを打ち明けている。それに対し、親鸞は「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じ心にてありけり」（『浄土真宗聖典（註釈版）』八三六頁）と、自分も同じ悩みを持っていると、共感の姿勢を示している。そこで、鍋島直樹は論文で悩める唯円に対し、親鸞の言葉を引用して、死をどのように受け入れるのかと、浄土真宗における救いの関係性を次のように述べている。

まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。

これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのしく、往生は決定と存じ候へ。³²

死を受容することは、人間には難しいことです。しかし、死の不安をかかえたままで大丈夫なのです。自らを偽らずに、臨終まだ消えることのない悩みや寂しさをかかえたままで、仏に救われます。なぜなら、罪や悲しみをかかえたものこそ、仏が浄土に往生させようと願っているからです。

では、誰にも代わってもらえない苦しみの渦中で、人はどう生きていったらいいのでしょうか。その答えを指し示す親鸞聖人の言葉が『歎異抄』後序に残されています。

それほどの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ³³

現にこの通りの私、どうしようもない苦しみを背負った私を、仏は抱きかかえます。そのまま、自分が願われた存在であると感じられること、そこに深き救いがあります。なす術もないこの自分にかけられた仏の悲願に気づく時、悲しみの中にありながらも深い安心を得て生き抜く力が生まれてきます。³⁴

とあるように、親鸞は、死に対し不安があり、煩惱を持ち自らの力ではどうすることもできない凡夫の姿を認識し、しかし、そのような凡夫だからこそ、自分が阿弥陀仏によって救われる存在であると気づくことができる。ここで注目すべきは、親鸞が悩みの中にある唯円に対して、自らもまた唯円と同じ悩みを持つ一人であることを明かし、対等な立場で接しており、決して上からの立場でない点である。

つまり、浄土真宗における寄り添いとは、僧侶が人々に対し一方的に救済するのではなく、私たちが共に阿弥陀仏の慈悲の中にあり、共に悩み共に歩む関係性だといえる。またその姿勢は『歎異抄』の第六条からも見られる。

親鸞は弟子一人も持たず候ふ。そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念仏を申させ候はばこそ、弟子にても候はめ。弥陀の御もよほしにあづかつて念仏申し候ふひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり。³⁵

とあるように、このような親鸞の対等な立場や共感の姿勢こそが、第一章で考察したビハラー活動における「竹のような存在」（花岡尚樹、「医療現場における僧侶の役割」『ビハラー入門』四四頁）、すなわち、患者の不安

を否定せず、共に揺れることができるケアのあり方であるといえるだろう。

鍋島直樹は、ビハラー活動を次のようにまとめている。

命あるものすべては、死の悲しみを包含しながら、生の輝きを放っています。（中略）ビハラー活動は、生老病死の苦しみのなかで、あらゆるものが相互に支えあって生かされているという縁起思想に基づいています。（中略）仏教者の看取りは、情緒的な対応を超える視座を示していました。それは、いかなる患者も、死への不安をかかえたまま、仏の大悲にいだかれて、限りなきいのちへと成っていく、という視座です。生死を超える心のつながりが、患者と家族、友人、恩師との間に感じられる時、その心のつながりは、患者にも看取るものにも安らぎとなっていくことでしょう。³⁶

とあるように、ビハラー活動は、阿弥陀仏に救われている対等な、人と人との支え合いによって行われている。この、「情緒的な対応を超える」とは、『歎異抄』第九条でもあったように、死への不安や悲しみをかかえ、阿弥陀仏の救いを疑ってしまう自分でも、不安や悲しみをかかえたまま阿弥陀仏は救うことだろう。悲しみを取り除こうとするのではなく、その感情のまま救われることにより、安らぎを感じることができる。

以上のように、浄土真宗における死の苦しみへの向き合い方と他者への寄り添いのあり方について考察した。親鸞が唯円に対して示したように、共感の姿勢は、自らも同じ悩みを持っている凡夫であるという、対等な仲間であるという、ビハラー僧に通ずる姿勢が見られた。浄土真宗における救いとは、死の恐怖を無理に取り除くことではなく、煩惱や不安をかかえたままの姿で、阿弥陀仏の慈悲に包まれているという事実に気づくことにあ

る。このような願われた存在としての気づきによって、孤独な死の苦悩を、浄土でまた会えるという繋がりを感
じることができる。

結論

本論文では、無宗教化が進む日本において、浄土真宗の教義に基づくビハラ活動がいかにして死の苦しみに
向き合い、苦しみを和らげるのか考察した。

序論では、合理主義や個人主義の浸透により、宗教的な価値観が薄れるなか、死や死後の世界といった誰も
かかえる問いに対して、宗教者が持つ知識をもって応える必要性を示した。第一章では、長岡西病院やあそか
ビハラ病院における実践を通じ、ビハラ僧の役割を考察した。ここでは、僧侶が一方的に布教を行うのではな
く、日常的な世話や見守りといった、医療や宗教といった専門から離れた関わりを通じて安らぎの場をつくる役
割を持ち、医療現場のマナーを遵守しながら、患者が今を生きるいのちとして見守られる実態を明らかにした。
第二章では、ビハラ活動とカウンセリングを比較し、その独自性を考察した。カウンセリングが二者関係にお
ける自己の内面的な気づきを志向するのに対し、ビハラは阿弥陀仏という第三者を介した三者関係の中に成
立する。これにより、自己の力では解決が難しい生老病死の根源的な苦しみに対し、阿弥陀仏の救いによって向き

合うことができる。第三章では、浄土真宗の死生観と他者への寄り添いについて論じた。阿弥陀仏の攝取不捨の救いは、死の恐怖を取り除くことではなく、煩惱をかかえたまま無力な凡夫である私たちが、そのままの姿で阿弥陀仏の慈悲に包まれていると気づくことにある。『歎異抄』に見られる親鸞の共感の姿勢は、僧侶が救う立場ではなく、共に悩み共に歩む、御同朋としての関係性であることを示しており、これによりビハラー僧が患者の不安に共に揺れる竹のような存在の根幹になっていることを論じた。

僧侶は死の苦しみをかかえる人に対して無力であり、患者を救う立場になく、共に死の苦しみをかかえ、共に阿弥陀仏に救われる立場にある。この姿勢によって、ビハラーに関わる人全てが、死の先にも人との繋がりを感ずることができ、死を終わりではなく、続きがあるものとして捉えられると、この論文を通して気づいた。第一章第一節で述べたように、一般的な死と結びついた仏教を払拭するために、ビハラー活動のような、今を生きるための仏教を広めることを課題としたい。

註

- 1 高橋原「ケアの場に求められる宗教性とは何か」、『東洋英和女学院大学死生学年報』、二〇一七年
- 2 森田敬史「ビハラー僧の実際」一九頁、『人間福祉学研究』三（一）、二〇一〇年
- 3 森田敬史、前掲書一九頁
- 4 崇徳会長岡西病院ビハラー病棟ホームページ (<https://www.sutokukai.or.jp/nagaokanishi-hp/service/vihara.html>) 二〇二五年六月二十六日閲覧
- 5 森田敬史「ビハラー僧の実際」、『ビハラー入門』、本願寺出版社、二〇一八年、二一頁
- 6 森田敬史、前掲書二二頁
- 7 森田敬史、前掲書二三頁
- 8 森田敬史、前掲書二四頁
- 9 花岡尚樹、「医療現場における僧侶の役割」、『ビハラー入門』、本願寺出版社、二〇一八年、三九頁
- 10 花岡尚樹、前掲書、四十頁
- 11 花岡尚樹、前掲書、四二頁
- 12 花岡尚樹、前掲書、四四頁
- 13 花岡尚樹、前掲書、四四頁
- 14 花岡尚樹、前掲書、四五頁
- 15 浄土真宗本願寺派社会部ビハラー活動の理念ホームページ、(<https://social.hongwanji.or.jp/html/c1Ip3.html>) 二〇二五年一〇月十二日
- 16 滋野井一博「ビハラーとカウンセリングの接点」『ビハラー入門』、本願寺出版社、二〇一八年、五二頁、
- 17 小正浩徳「ビハラーにおけるカウンセリングの意義」『ビハラー入門』、本願寺出版社、二〇一八年、六九頁、

- 1 8 小正浩徳、前掲書、七五頁
- 1 9 玉木興慈「浄土真宗の人間理解について」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、一一一頁、
- 2 0 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、四一頁
- 2 1 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、七三五頁
- 2 2 鍋島直樹「親鸞聖人における死と救い 心の支えとなるもの」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、一三二頁
- 2 3 鍋島直樹、前掲書、一三六頁
- 2 4 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版、七七〇頁
- 2 5 鍋島直樹「親鸞聖人における死と救い 心の支えとなるもの」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、一四四頁
- 2 6 末木文美士『親鸞―主上臣下、法に背く―』ミネルヴァ書房、二〇一六年、五九頁
- 2 7 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、八三二頁
- 2 8 打本弘祐、「親鸞における対象喪失（下）親鸞思想とグリーンフケアの接点を求めて」『真宗学』、二〇一九年、七一頁
- 2 9 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、五九六頁
- 3 0 鍋島直樹「親鸞聖人における死と救い 心の支えとなるもの」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、一二四頁
- 3 1 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、八三六頁
- 3 2 前掲書、八三七頁
- 3 3 前掲書、八五三頁
- 3 4 鍋島直樹、「親鸞聖人における死と救い 心の支えとなるもの」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、一三四頁
- 3 5 『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、八三五頁
- 3 6 鍋島直樹、「親鸞聖人における死と救い 心の支えとなるもの」『ビハーラ入門』、本願寺出版社、二〇一八年、

参考文献

書籍

- ・ 友久久雄・吾勝常行・児玉龍治『ビハラ入門 生老病死に寄り添うために』本願寺出版社、二〇一八年
- ・ 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典―註釈版第二版―』本願寺出版社、二〇一六年
- ・ 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗辞典』本願寺出版社、二〇一三年
- ・ 中村元『岩波仏教辞典第二版』岩波書店、二〇〇二年
- ・ 末木文美士『親鸞―主上臣下、法に背く―』ミネルヴァ書房、二〇一六年

論文

- ・ 高橋原「ケアの場に求められる宗教性とは何か」、『東洋英和女学院大学死生学年報』、二〇一七年
- ・ 森田敬史「ビハラ僧の実際」『人間福祉学研究』三（一）、二〇一〇年
- ・ 打本弘祐、「親鸞における対象喪失（下） 親鸞思想とグリーンケアの接点を求めて」『真宗学』、二〇一九年

インターネットサイト

- ・ 崇徳会長岡西病院ビハラ病棟ホームページ (<https://www.sutokukai.or.jp/nagaokanishi-hp/service/vihara.html>) 二〇二五年六月二十六日閲覧
- ・ 浄土真宗本願寺派社会部ビハラ活動の理念ホームページ、(<https://social.hongwanji.or.jp/html/c1lp3.html>) 二〇二五年一〇月十二日

